様式7　授業改善プロジェクト

アクション・リサーチのまとめ

英語教員指導力向上研修

受講番号　19072　学校名　安芸中学校　氏名　公文　悦子

研究の背景

研究対象（学年、クラス等）　3年生　生徒数　35　名

科目名　3年生　単位数（授業時数）　3　時間　使用教科書名　SUNSHINE ENGLISH COURSE　3（開隆堂）

クラスの様子・特徴

明るくて元気のある学年である。しかし、1年生の時から、生徒によって授業に取り組む態度に差があり、学力差が生じているため、生徒から希望を取って、2つのクラスを習熟度によって、4つに分割している。私はそのうちの2つのクラスを担当している。

問題の確定

英語の語順を理解し、既習の語を使って、自由に英作文する力をつけることが英語への苦手意識を払しょくすることにつながる。

予備調査

A 授業の観察	B 生徒による授業評価	C 学力データ
どちらのクラスも、ほぼ全員が授業に集中して前向きな態度で取り組める。英作文が苦手だということで、手始めに単語の並べ替え問題をグループごとで取り組むと、楽しんでやっていた。新出文型の英作文に挑戦させたが、20%ほどしか正答がなかった。	1学期末に行った授業評価の結果、「授業の内容に興味が持てましたか」という設問に6割の生徒が「どちらともいえない・もてない」と回答した。授業展開が教科書の内容理解のみにとどまり、教材や展開に工夫が足りなかったと反省している。	2年生3学期に受けたCRTテストの結果から、特に表現の能力と言語や文化についての知識・理解が課題であることがわかった。これは、単語や連語、基本的な文法事項が十分に覚えられていないため、表現活動につながらないとも読み取れる。

リサーチ・クエスチョン

生徒が生き生きと英語を書いて、自己表現するためにはどのような手立てをとればよいだろうか。

仮説・実践・検証

仮説1 ⇒	実践1 ⇒	検証1
授業の始めに単語テストに取り組めば、英語のつづりと意味を身につけられるであろう。	次回行う単語テストの問題を「英語・品詞・日本語」の順に記入してプリントにまとめ、生徒に配布し、宿題としてノートに1ページづつ練習してきたうえでテストを受けるように指示した。テストの前には1分間の学習時間を取った。1回5問で、英語の発音を聞いて、綴り・品詞・日本語を記入させ、綴りが10点、品詞と日本語で10点、計100点満点とした。このテストを9月から12月にかけて、計22回行った。	授業の始めには単語テストがあることが、だんだん当たり前になり、回数を追うごとに意欲的に取り組める生徒が増え、休み時間に友達と協力して勉強する生徒が出てきた。単語を覚えることで、英語がわかるようになることが実感でき、宿題を大切にする生徒が増えた。ひとつのクラスは9月から12月にかけての単語テストの平均点が9点アップし、単語を書く力が伸びたことが、英作文の力の伸びに比例していると考えられる。
仮説2 ⇒	**実践2 ⇒**	**検証2**
英文の並べ替え問題を解いていくことで、英語の文の構造に慣れてくるであろう。	最初は2人のペアあるいは、座席によっては3人のグループに、基本文を紙に印刷し、単語ごとにハサミで切ったものを渡して、正しい英文になるように並べ替える問題に取り組ませた。楽しく取り組めていたが、どうしても得意な生徒が主導権を握ってしまうため、また全員が活動に慣れてきたこともあり、10月ごろからは個人の活動に切り替えた。完成させた後は、挙手で英文とその日本語の意味を発表させた。	個人での活動に変えてから、しばらくは戸惑う生徒がいた。しかし、制限時間2分で始めた活動も、慣れてくるとほぼ全員が1分で完成できるようになった。繰り返し、並べ替えに取り組むことで、英語の語順を感覚的に身につけられた結果だと思う。
仮説3 ⇒	**実践3 ⇒**	**検証3**
新出文型の音読筆写に取り組めば、英作文能力が身に付くであろう。	実践2で並べ替えをさせた英文を、各自のノートに1分30秒間で、できるだけ多く音読筆写させた。英文を言いながら書くように指示したが、実際にはあまり発音せず、黙々と書いている生徒が多かった。	音読筆写させた英文を、次回の授業の最初に行う単語テストの際、黒板に書かれた日本語を見て、テスト用紙の裏面に英作文させた。統計を取った4回のうち、その時の英文の難度にもよるが、1回目の正答率が30%、2回目33%、3回目62%、4回目58%とだんだん高くなってきた。回数多く書くことによって、英文を覚えることと、確かめをすることによって、正確に覚えようとする生徒の意識が高まった。

研究の成果

今回アクション・リサーチの一連の流れの中で、自らの授業を科学的に研究していく方法が身に付いたことが、最も大きな成果ではないかと考える。私の研究テーマは「書く力を育てる」ことであったが、研究の結果、生徒の書くことによる自己表現力が飛躍的に伸びたとは言い難い。しかし、語の並べ替えや音読筆写をしたパターン化した英文については、2学期末には5割程度の生徒が書けるようになり、期末テストの英作文問題では、正答率が3割程度へと向上した。そして取り組みを通して、授業への集中力や理解力が増していったことも成果である。

今後の授業改善の課題

「書く力」については、パターン化した英文を書く力は向上したが、今後は自分の思いや考えを表現する力をつけていくことが課題である。また、生徒による授業評価で「興味関心」の項目が低かったことから、個人やペアでの口頭・筆記両面での自己表現活動を増やしていく必要がある。また、入試問題を意識した状況設定のある英作文への取り組みや、主語・動詞・目的語を別々の生徒が考えるゲーム形式での英作文に取り組みたい。

リサーチについての問合せ先：　職場電話　0887-35-3014